

古代語体系から近代語体系への移行期における 和漢対立語の意味変化

——「のがる」「まぬかる」を例として——

久保香珠

一章 本稿の目的

本稿では、語彙史研究の視点から軍記物資料を取り上げ、古代語から近代語へと移行する過渡期における意味変化と語彙体系の推移の問題を考察する。

変化途中時期にあたる中世（特に和漢混淆文など）においては、いわゆる広義の古代語の意味解釈の観点だけでなく、近代語での意味分析も比較参照するような分析が有効であること、具体的事例を提示しながら実証的に論じてみたい。

さて、日本語は、大きくは中世を一つの大きな境目として、古代語から近代語へと大きく変化してきた。語彙、文体の上でも、その頃、漢字仮名交じり文について和漢混淆文が現れ、中古の古代語の姿から徐々に脱皮していくようになるが、中世前半（特に鎌倉の前半）ころまではまだ中古的な特徴を色濃く残している。そのような過程にある院政鎌倉期の説話集における

日本語は、まだ和漢混淆や、新たな語彙体系の構築が十分進行してはおらず、中古期の和文体的特徴と漢文体的特徴のいわば混乱併用、新旧混用、混交混在などともいうような状況を呈しているように見える。

一方、軍記物では和漢の混淆がより一歩進行していることが指摘されているように、古い特徴を一部に残しながら、新たな使い分けの基準、新たな規則性による語彙や文体の使い分けの特徴の芽生えをうかがうことができるように思われる。

本稿で取り上げる和漢対立語、つまり和文語・漢文訓読語の対立をなすといわれる「のがる」「まぬかる」の2語にも、そのような推移が見られる。中古や、中世でも説話集などの一部の資料では、古語辞典や先行研究ですでに指摘されているような意味的使い分けが確認できるものの、一方、軍記物など、より新しい中世前期の資料では、古代語での基準による使い分けはより混沌として見える。それらでは、むしろ近代語現代語の

意味基準から意味を把握した方が、よりその語彙的使い分けを整理しやすく、新たな語彙体系を把握しやすいうちに見てとれる。つまり、すでに近代語的語彙体系に推移している比率が高いようなのである。そのような事例の分析にあたっては、今回のような現代日本語における最新の意味分析（『国語辞典』）であつてもその解釈が有効にはたらく、古代語的語彙体系で把握できる（説明できる）割合よりも、むしろ、近代語体系での把握が、より高い整合性をもつように見られた。

そこで、本稿では、これらの和漢対立の語の使い分けを新たに明らかにする研究手法の一つとして、古代語の観点による意味把握の分析と、近代語現代語の観点による意味把握の分析との両面から語彙を比較検討するという比較対象的な分析を試みる。それによって、変化過渡期における語彙の意味分析を行う一つの手法を提示しつつ、当該時期の語彙の意味分析の一方法として、実践的な事例研究を提示しようとするものである。

二章 先行研究

古代語から現代語へと移行する過渡期にあたる中世の特に前半の語彙では、和文体的特徴と漢文訓読体的特徴とが混在している。峰岸明氏は、例えば「和漢混淆文の語彙」（一九七四）^{注2}で、その文体の混在ないし混淆の様は、特に語彙の面において顕著に表れていると述べている。そのような中でも、和漢混淆の顕著な資料である軍記物、特に『平家物語』においては、和漢混淆がより進んでいることはすでによく知られている。その

ような語彙の一面として、木村真紀による『平家物語』の語彙の分析によれば、^{注3}併用される混淆した類義語の中でも、新たな使い分けを生みつつ、類義語でも意味や用法のより広い語が多用され生き残っているという傾向があり、その過渡の様相から現代語への連続性が見て取れるという。

さて、院政期から中世にかけての、いわゆる和漢対立をなす類義語・同義語の文体差や、意味の相違の問題、また、それらの資料毎の使い分けや解釈という研究課題は、資料における訓読やその注釈書での解釈の研究も含みながら、従来から長く展開されてきている。

例えば、漢字仮名交じり文であり、説話集の代表作でもある『今昔物語集』の訓読研究は盛んに展開してきたが、近年では、その類義語・訓読解釈の研究を牽引している研究として、その主導者とも言える日野資純^{注4}の一連の研究があろう。

日野資純は、本稿で取り上げる「のがる」「まぬかる」の類義語である、「ニグ」と「ノガル」の訓読の問題も取り上げている。その詳細な分析から、「ノガレル」は「抽象的な状況からの回避」で、「ニゲル」は「具体的状況からの離脱」であるという意味の差を導き出した。本稿の「のがる」「まぬかる」においての意味・用法の振り分け基準を決める際も、古語辞典での解釈を併せて踏まえつつ、日野のこの解釈を参考にまずは考察してみた。

同じく関連する先行研究としては、『今昔物語集』を資料に、漢字の訓読から類義語の意味差を導き出したのが田中牧郎の論

がある。田中は、「今昔物語集の「逃」「遁」「免」「脱」と「ニグ」「ノガル」「マヌカル」〔国語学研究二七〕^{注4}において、「日本古典文学大系」と「日本古典文学全集」で示された訓の不一致・不統一を再検討している。そこで、「大系と全集とで異調が目立ち、読み決定に至るまでの作業過程において興味深い問題が看取でき、最終的には明確な形に解決できる事例」として、漢字「逃」「遁」「免」「脱」と訓「ニグ」「ノガル」「マヌカル」を取り上げている。結果として、「逃」は「空間的な離脱を表す」、「遁」「免」「脱」は「状況的な離脱を表す」と示している。また「遁」「免」「脱」は、「置換可能であるほどに近接した意味・用法をもっている」ということである。その中でも、「遁」は漢文訓読文体・和文体の対立にかかわらない今昔編者の基本的文体に属す要素、「免」は漢文訓読体に属す要素」と推測している。さらに、訓「ニグ」「ノガル」「マヌカル」の平安時代の意味・用法を分析し、両者を照らし合わせている。平安時代において、「ニグ」は「不愉快・不都合から空間的に離脱すること」、「ノガル」「マヌカル」は「不愉快・不都合」から状況的に離脱すること」を意味するとし、さらに「マヌカル」は特に訓読語としての性格を持つとしている。結果として、「逃」―「ニグ」・「遁」―「ノガル」・「免」「脱」―「マヌカル」という一漢字に一訓が対応するように整理できたとしている。

しかし、これは、一定の成果には至っていないようだが、すべての訓を確定するには至らず、田中氏の当初の目的「日本古典文

学大系」と「日本古典文学全集」で示された訓の不一致・不統一の漢字の読みを再検討しよう」という試みとしては課題も残している。また漢文訓読体において「ノガル」「マヌカル」ともに用例が見られるということは、そこに、何かしらの意味・用法における差異があった可能性も残しているように思われる。

これらの課題について、本稿では、中世軍記物資料を中心とした用例をもとに明らかにしていくことにしたい。

三章 古語辞典における「のがる」「まぬかる」の解釈

三一 各辞典での意味解釈

まず主要古語辞典の『日本国語大辞典』（以下『日国』）、『小学館古語大辞典』（以下『古語大』）、『岩波古語辞典』（以下『岩波』）、『角川古語大辞典』（以下『角川』）、『時代別国語大辞典（室町時代）』（以下『時代別室町』）から記載事項を引用し、まとめる。重要事項には傍線を付しながら、各語について辞典ごとの比較を行う。

「のがる」

『日本国語大辞典』表記「のがれる」

①つかまらないように逃げる。②離れ遠ざかる。触れないように離れた位置に身を置く。しなくてはすむようにす

る。③ある状態にならなくてすむ。まぬがれる。④言い
のがれる。辞退する。⑤関係を断つ。無関係である。

【語誌】古代語では「難をのがる」「難をまぬかる」など、

「のがる」「まぬかる」は意味・用法上通うところがあ
ったが、「まぬかる」は漢文訓読調の文章にのみ用いら
れたのに対して、「のがる」は文体の別に関わりなく用
いられる日常語であった。現代語では、「まぬがれる」
は災難に遭遇しないで済むことをいうが、「のがれる」
は遭遇を回避することも不快な状況から離脱することも
表し、「まぬがれる」より意味が広いと考えられる。

『小学館古語大辞典』

①つかまらないように逃げ去る。②ある状況から免れる。

宿世・運命・縁・法などから放たれる。関係を絶つ。③

言い逃れをする。辞退する。

『岩波古語辞典』表記「のがれ」

①宿世・物の怪・いやな相手などから逃げきる。まぬかれ
る。②言いのがれをする。

『角川古語大辞典』

「にく」がみずからの動作に重点があるのに対して、相手、
対象から退くの意味。

①逃げ出す。脱出する。②宿世・物怪・疫病など離れにく
いものや災いから逃げる。免れる。③離れた立場に身を
置く。かかわりを持たぬようにする。④現世を避ける。
遁世する。⑤言い逃れをする。

↓のがれぬ 連体修飾に用いる。①逃げることができな
い。避けられない。やむをえない。②特に、血縁・主従
関係・信義などのうえで、切っても切れない間柄であ
る。

『時代別古語大辞典（室町時代）』

①自らを拘束する絆・しがらみとなるものを断ち切って、
その圏外に身を置くようにする。②本来なら当然その身
に及ぶはずの危機的状況を何とかかわして、まぬがれ
る。

「まぬかる」

『日本国語大辞典』表記「まぬがれる」

危険なことや不利なことなどから、都合よく逃れられて、
そのことに関わらないですむ。具合よく、好ましくない物
事に出あわないですむ。まのがる。

【語誌】類義語「のがれる」が不快な状況から離れ去る意
であるのに対して、「まぬがれる」は不快な状況に遭わ
ないで済む意を表す。

『小学館古語大辞典』

《「ま」は完全・純粹などの意の接頭語。「まのかる」とも》
関わらないですむ。まぬがれる。

『岩波古語辞典』表記「まぬかれ」

事に当たらずにすまうことができる。

『角川古語大辞典』

好ましくない物事・状態から抜け出す。また、それを回避する。多く打消の語を伴って用いられ、それから逃れえぬことを表す。

『時代別古語大辞典（室町時代）』

その身に当然受けるはずであった罰や試練などを、蒙らないうですむこととなる。

三二 古語辞典の解釈の比較

「のがる」について各辞典を比較していくと、それぞれ異なる記述となっている。『日国』『岩波』『角川』に共通するのが「(不都合なことから)逃げる」という点であるが、『岩波』『角川』は「宿世、物の怪、いやな相手」というように具体例を挙げている。今回調査した中でも、特に「宿世、世」は「のがる」に特有の対象であると考えられる。「まぬかる」については、『角川』の「回避」という用語に象徴されるように、「(不都合なことに)出あわずにすむ」という意味が共通するようだ。しかし、『日国』の語誌欄にも「難をのがる」「難をまぬかる」など、「のがる」「まぬかる」は意味・用法上通うところがあつた」とあるように、「のがる」と「まぬかる」で表現が似通っていたり(『角川』「のがる」の「逃げ出す、脱出する」と、「まぬかる」の「抜け出す」)、「のがる」の記載に「まぬがれる」と出てきたりと、「のがる」と「まぬかる」をはっきりとは区別し難いようだ。

とはいえ、「のがる」と「まぬかる」で確実に言える違いが

ないわけではない。文体という点で明らかな傾向が見られ、『日国』にあるように、「まぬかる」は漢文訓読調の文章で用いられ、「のがる」は文体に関わらず用いられたとされる。また、特徴的な記述として、『角川』に注目すると、「にぐ」と比較して、「にぐ」がみずからの動作に重点があるのに対して、相手、対象から退くの意」とある。これは、『角川』にしかない、独自の視点である。五章以降の章段において、実際に用例を挙げながら、その傾向を検証していく。

四章 用例の分析——中世軍記物を中心に——

「まぬかる」が漢文訓読調の文章に出現するという傾向に沿い、中世軍記物資料を中心とし、その前段階の平安後期の和文作品、及び説話を対象に用例を挙げ、その意味・用法を調査した。(分析の対象作品は『夜の寝覚』(以下『寝覚』)、『狭衣物語』(以下『狭衣』)、『平家物語』(以下『平家』)、『保元物語』(以下『保元』)、『平治物語』(以下『平治』)、『義経記』、『曾我物語』(以下『曾我』)、『太平記』、『宇治拾遺物語』(以下『宇治』)、『古本説話集』(以下『古本』) 以下、抜粋した典型例とともに記述していく。

四一 用例数から見た傾向

表1に表した用例数から見える、作品ごとの「のがる」「まぬかる」の傾向としては、やはり和文作品では「まぬかる」の出現がほとんどないということが言えるだろう。『狭衣』に1

表1：10作品の用例数一覧

	寢覚	狭衣	平家	保元	平治
のがる	31	7	46	15	11
まぬかる	0	1	9	0	1
	義経記	曾我	太平記	宇治	古本
のがる	逃 (11)、 遁 (14)	39	91	5	2 (-まうす)
まぬかる	0	2	7	4	0

の比較、分析の中心となる。

意味・用法の振り分けの基準は、日野(二〇〇二)^{注2}の「ニグ」「ノガル」の区別の際の基準「ノガルは、基本的には目に見えない、抽象的状況の回避が中心であるのに対して、ニグは、目に見える具体的状況から離脱、しかも特にその場で離れることが中心である」を参考に、

(a) 「脱出」(すでに危機的状況や不都合な状況にあるところから抜け出す)

例あるが、対象が「五濁悪世」で仏教的な表現という点と、漢文の要素を含んでいる。それを考慮すれば、「まぬかる」が和文体では用いられないという傾向は、平安語彙でも明瞭であることを確認できよう。

四二 意味分析

今回の調査対象になった作品の中でも、「のがる」と「まぬかる」が共に用例のある『狭衣』『平家』『平治』『曾我』『太平記』『宇治』が、「のがる」と「まぬかる」

(b) 「回避」(目前に迫った危機的状況や不都合な状況から事前に回避する)

四二一「のがる」と「まぬかる」の使い分け

これより、軍記物を中心に、「のがる」と「まぬかる」の意味・用法ごとに典型例を挙げ、分析していく。なお、「のがる」「まぬかる」には傍線を、それぞれの対象となる語は波線を付している。まず、『平治物語』に出現する、明らかに「のがる」と「まぬかる」を使い分けている例を二例挙げる。

(一) 兵四面に打立て、御所に火をかけたれば、上下の女房達あはてさはぎ出られけるを、散々に射ければ、火をのがるものは矢をのがれず、矢をのがる者は火をのがれず。(『平治物語』上巻「三条殿」)

(二) 矢をまぬかれんとする者はるにこそおほく入れ、下は水に溺、中は人に押れ、上は猛火もえかかりければ、命のたすかるべき事を得ず。(『平治』上巻「三条殿」)

(一) は敵兵に囲われた御所が火に覆われ、その火の中から「脱出」しても、敵の矢の攻撃から「脱出」できず、矢の攻撃から「脱出」しても、御所を覆う火から「脱出」できない、という文脈である。ここでの「のがる」は、自分にとって不利な状況から「脱出」するという意味である。(二)の一文の直後に(二)が続く。(二)は(一)と同じように矢を対象にしているが、「まぬかる」を使っている。(ただし、新全集では異なる

る表現である。(一)「火をのがるるものは：(中略)：のがれず。」の部分は「火に焼けじと出づれば矢に中り、矢に中らじとすれば火に焼けけり。」(二)の冒頭は「矢に恐れ、火を悲しむるは、：である。」旧大系の本文では、矢の攻撃を目前で「回避」しようとする者は、井戸にたくさん居る、という文脈で、この「まぬかる」は「回避」の意味である。この二例では、「のがる」は(a)の意味、「まぬかる」は(b)の意味、というように使い分けされている。以下では、他の作品ではどうか、「のがる」「まぬかる」それぞれについて、『平家物語』を中心に見ていく。

四二一<二>「のがる」

まずは、(一)のように(a)「脱出」の意味を表す「のがる」の例として、『平家物語』から典型的なものを2例挙げる。

(三) 先帝にをくれまいらせにし久壽の秋のはじめ、同じ野の露ともきえ、家をもいで世をものがれたりせば、かかるうき耳をばきかざらましとぞ、御歎ありける。

〔平家〕巻一「二代后」

↓〔現代語訳〕先帝に先立たれ申した久壽の秋の初め、先帝と一緒に死に、あるいは出家・遁世でもしていたら、今こんないやな事を聞かなかつたらうにと、お嘆きになった。

(三)の「のがる」は、「世」を逃れるという遁世の意味で使われている。この場合、「世」という不都合な環境、状況の中から抜け出すということで、(a)「脱出」の意味と判断した。

「世をのがる」という用法は中世に限らず、今回の調査で、和文作品の対象となった『狭衣物語』にも例があり、慣用的な表現となっているのではないだろうか。

(四) かくして十郎藏人、五百余騎が纒に卅騎ばかりにうちなされ、四方はみな敵なり、御方は無勢なり、いかにしてのがるべしとは覚えねど、おもひき(ツ)て雲霞の如なる敵のなかをわ(ツ)てとをる。〔平家〕巻八「室山」

↓〔現代語訳〕こうして十郎藏人の兵五百余騎がわずか三十騎ほどに討ちなされて、四方はみな敵だし、味方は無勢だ、どうして逃げたらいいかはわからないが、思い切つて雲霞のような敵の中を割って通る。

(四)は四方を敵に囲われた中から抜け出そうとしている場面、(a)「脱出」の意味と判断した。

次に、(b)「回避」の意味を表す「のがる」の例を、同じく『平家物語』から典型的なものを2例挙げる。

(五) 奉加をこそし給はざらめ、これ程文覚にからい目を見せ給ひつれば、おもひしらせ申さんずる物を。三界は皆火宅なり。王宮といふも、其難をのがるべからず。〔平家〕巻五「文覚被流」

↓〔現代語訳〕「寄付をなさらないのはともかくも、これほど文覚にひどい目をお見せになったからには、今に思い知らせてさしあげますぞ。三界は皆火宅だ。王宮であっても、滅亡の難は免れることはできない。」

(五) は「滅亡の難」が対象であるが、これは目前に迫っている危機で、それを事前に回避することはできないという文脈である。従って、(五)の「のがる」は(b)「回避」の意味であると判断した。ただし、「危機的状況の中にある」と捉えた場合、(a)「脱出」となり得るので、意味を判別し難い例である。

(六) 中将「心のうちをばただをしはかり給べし。されどもつるにのがれはつき身にもあらず。又こん世にてこそ見たてまつらめ」(『平家』巻十一「重衡被斬」)

↓〔現代語訳〕 中将は「私の心中をただご推量ください。けれども、結局死からのがれきることのできる身でもない。また生まれてくる次の世でお目にかかろう。」

(六) は「死」が対象である。目前に迫っている「死」と捉えると、「のがる」は(b)「回避」の意味であると言える。ただし、「新全集」の現代語訳は「のがれ」となっていて、やはり、「回避」か「脱出」かの判別が難しい用法である。

四二一<三>「まぬかる」

「まぬかる」においても、(a)(b)の両方の意味で用いられている。まずは『平家物語』における、それぞれの用例を挙げていく。

(七) いたづらに人を謗じ法を謗ず、あに閻羅獄卒の責をまぬかれんや。(『平家』巻五「勸進帳」)

↓〔現代語訳〕 むやみに人をそしり法をそしるだけである。どうして閻魔庁の獄卒の責めを免れることができよう

か。

(七) は「閻羅獄卒の責」が対象である。悪行に対する責めを、事前に「回避」することはできないという文脈で、(b)「回避」の意味であると判断した。

(八) 昔秦の昭王のとき、孟嘗君めしいましめられたりしに、きさきの御たすけによッて、兵物三千人をひきぐして、にげまぬかれけるに、函谷関にいたれり。(『平家』巻四「大衆揃」)

↓〔現代語訳〕 昔、秦の昭王の時、孟嘗君が囚われ縛られたが、后のお助けによって、兵三千人を引き連れて逃げのがれて、函谷関に至った。

(八) では、孟嘗君が敵に囚われた状況から抜け出すという文脈で、(a)「脱出」の意味で用いられていると判断した。

四二一<四>『平家物語』における「のがる」「まぬかる」の例

『平家物語』において全用例を分析し、意味を判別したところ、表2のような傾向が表れた。今回の調査における(a)

「脱出」と(b)「回避」の判別基準でも判断し難い例は、明確に判別したものと区別するため、「不明」とした。「のがる」「まぬかる」ともに、約九割の用例を、(a)「脱出」か(b)「回避」のどちらかに判別することができた。「のがる」の全用例の八割近くが(a)「脱出」、「まぬかる」の全用例八割近くが(b)「回避」という結果が出た。『平家物語』においては、「のがる」は「脱出」の意味に、「まぬかる」は「回避」の意味にそれぞれ偏って使われていたということが言えるだろう

表2：『平家物語』の意味傾向

平家	回避	脱出	不明
のがる	5 (11%)	35 (76%)	6 (13%)
まぬかる	7 (78%)	1 (11%)	1 (11%)

う。

しかし、この結果は『平家物語』においてのみ言えることである。他の作品でも同じような傾向が見られるとなれば、中世作品では、ある程度の傾向に沿って、「のがる」「まぬかる」の使い分けがなされていたことになる。ところが中世は、和文体と漢文訓読体の比が作品によって異なり、「のがる」「まぬかる」、特に「まぬかる」の出現率にバラつきがある。「まぬかる」については、漢文訓読体特有の語であるとされているため、「のがる」「まぬかる」とも用例がある作品でも、文体比が異なると同じ土俵で比較することはできない。そこで『平家物語』と同じ、和文・漢文訓読が八・二という文体傾向であるもので、説話の『十訓抄』が挙げられる。次に、この『十訓抄』の用例を分析する。

四一―五『十訓抄』における「のがる」

「まぬかる」の使い分け

先に述べたように、「十訓抄」の文体傾向は、『平家物語』のそれに近く、和文体・漢文訓読体の比率が八・二である。そして「のがる」と漢文訓読特有語「まぬかる」の比率は十七・四であり、文体と語彙がほぼ比例している。それぞれ(a)「脱出」と(b)「回避」どちらの意味で使われているか、典型例を挙げて考える。

まずは「のがる」の例である。

- (九) 夫、世を遁れて、霸陵山に入りける時、…〔十訓抄〕
 ↓〔現代語訳〕 夫が世を遁れて、霸陵山に入った時も、…
 (一〇) 貞任らに困まれて、みなのがれたし。〔十訓抄〕
 ↓〔現代語訳〕 貞任らに困まれて、誰一人として逃れ出ることではできなかった。

- (九) は(三)と同じ用法で、遁世の意味である。「のがる」によく出てくる、(a)「脱出」の典型例である。(一〇)は敵の貞任らに困まれて、逃げ出すことができなかった、というもので、(a)「脱出」の意味であることがわかるだろう。

- (十一) この千が一の徳をならひて、かの方が一の失をのがるべし。〔十訓抄〕

↓〔現代語訳〕 この千に一つの徳にあやかり、かの方に一つの失敗から離れなくてはならない。

- (十一) は「万に一つの失敗」を事前に避けるということ、(b)「回避」の意味である。

次に「まぬかる」の例である。

- (十二) 仏法を軽しめ、退けしわが朝の逆臣、天の殃をまぬがれず、いはむや庶人の身においてをや。〔十訓抄〕
 ↓〔現代語訳〕 法を軽んじ、退けた我が朝の逆臣たちは、天の罰を免れることはできなかった。

- (十二) は「天の罰を免れない」とあり、これから受けるだろう天の罰を、事前に避けられないという(b)「回避」の意味である。『十訓抄』における「まぬかる」の(b)「回避」の例はこの一例のみである。

(十三) 履中天皇、いまだ太子の御時、御弟の住吉仲皇子のために武をおこして、太子の難波の宮をかこめりしに、太子：おどろき給はず。すでにまぬがれがたくおはしけるを、…(『十訓抄』)

〔現代語訳〕：御弟君の住吉仲皇子がもとで軍兵がうごかされて、皇太子の難波の宮殿が囲まれることがあった。

皇太子は：もう逃げおおせそうもなくなつていらつしやうたのだが、…

(十三) は皇太子が、住吉仲皇子の軍兵に囲まれ、そこから逃げ出すことができない、という(a)「脱出」の意味である。『十訓抄』においては、(a)「脱出」の例がこの他に三例ある。

「のがる」も「まぬかる」も(a)(b)両者の意味の例がある。「のがる」は(a)「脱出」の傾向が強く、『平家物語』と同じような結果と言えるが、「まぬかる」については(b)「回避」が一例、(a)「脱出」が三例と(a)「脱出」のほうに偏っている。これは『平家物語』の用例分析の結果と違ってくる。用例数の差が明らかにあるが、やはり(a)「脱出」(b)「回避」を基準にすると、作品によって異なつて、「のがる」と「まぬかる」の使い分けの基準を定めるに至らないことになる。

五章 現代語の語義解釈(『日本語辞典』)による再分析と考察

ここで視点を変え、中世語彙が、近現代語の意味・用法に近づいているということに着目して、現代日本語の辞典『日本語新辞典』にある、類語の異同の解説を参考に、使い分けの基準を再検討することにした。まずは「のがれる」と「まぬがれる」の記載事項を、一部引用する。

「のがれる」

①あぶない、また、いやな場所や状態から離れて遠くへ行く。

②自分の負担や責任を身に受ける状態から離れる。

【類語】「逃れる」「免れる」の異同

1. 好ましくない物事に関係しないで済むという意では共通するが、「逃れる」は意志的行為の結果という感じが強いのに対し、「免れる」は偶然など運命的なものが感じられる場合に使われることが多い。

2. 従つて、どうしようもない事柄について「免れる」は「免れないこと」と打消しをつけるだけですむが、「逃れる」は人の力ではできないの意で「逃れられないこと」というように打消し以外に可能も付けないと使えない。

「まぬがれる」

好ましくない物事にかかわらないで済む。

『日本語新辞典』の類語欄の1にある、「逃れる」は意志的行動の結果、「免れる」は偶然など運命的なもの（無意志）、という異同の基準に注目して、(A)「意志」(B)「無意志」で意味・用法の振り分けを試みる。まず、先に挙げた『平家』の例(三)～(八)で考えると、次のようになる。

(三) 先帝にをくれまいらせにし久壽の秋のはじめ、同じ野の露ともきえ、家をもいで世をものがれたりせば、かかろうき耳をばきかざらましとぞ、御歎ありける。(『平家』巻一「二代后」)

「のがる」の例でよく出現する「遁世」の例であるが、「遁世」は自らの意志で俗世を離れるので、(A)「意志」に振り分けることができる。

(四) かくして十郎藏人、五百余騎が纔に卅騎ばかりにうちなされ、四方はみな敵なり、御方は無勢なり、いかにしてのがるべしとは覚えねど、おもひき(ツ)て雲霞の如なる敵のなかをわ(ツ)てとをる。(『平家』巻八「室山」)

この例で注目するのは「いかにして」という部分である。「どのようにして敵から逃れようか」という文脈であるため、「いかにして」から自分の意志で逃れようとしていることがうかがえるだろう。するとこの「のがる」も(A)「意志」であ

る。

(五) 奉加をこそし給はざらめ、これ程文覚にからい目を見せ給ひつれば、おもひしらせ申さんずる物を。三界は皆火宅なり。王宮といふも、其難をのがるべからず。(『平家』巻五「文覚被流」)

四章においては、「回避」か「脱出」かを判断し難い例であった。ここで注目するのは「のがるべからず」である。『日本語新辞典』の類語欄の2にある「逃れる」は人の力ではできないの意で「逃れられないこと」というように打消し以外に可能も付けないと使えない。」という現代語の「のがれる」の特徴に沿うものである。この例はやはり、「自分の意志では逃れることができない」ということを表していて、文脈としては「のがるべからず」で「無意志」をあらわしているが、「のがる」自体は(A)「意志」である。

(六) 中将「心のうちをばただをしはかり給べし。されどもつるにのがれはつべき身にもあらず。又こん世にてこそ見たてまつらめ」(『平家』巻十一「重衡被斬」)

この例も(五)の例と同じく「のがれはつべき身にもあらず」の可能的助動詞「べし」に注目すると、「自分の意志では逃れることができない」ということを表していることになる。よって(A)「意志」である。

ここまで『平家物語』における「のがる」の例の一部を見てきたが、四章で「回避」と「脱出」で分けられた例が、全て(A)「意志」で共通することがわかった。これは『日本語新

辞典の「逃れる」の基準に沿うものである。一方「まぬかる」はどうであらうか。

(七) いたづらに人を誑じ法を誑ず、あに閻羅獄卒の責をまぬかれんや。〔平家〕巻五「勸進帳」

(七) の対象は「閻羅獄卒の責」で、悪行に対する責めである。これは『日本語新辞典』の類語欄(2)における「どうしようもない事柄」であり、自分の意志から外れた運命的なものである。従って(七)の「まぬかる」は(B)「無意志」である。

(八) 昔秦の昭王のとき、孟嘗君めし、いましめられたりしに、きささきの御たすけによ(ツ)て、兵物三千人をひきぐして、にげまぬかれけるに、函谷関にいたれり。〔平家〕巻四「大衆揃」

(八) は「きささきの御たすけによ(ツ)て」という部分に注目すると、「きささき」つまり他者の助けで逃げ出すことができたということになる。自分の意志的行為の結果でないため、まさに(B)「無意志」である。

このように「まぬかる」の例は(B)「無意志」に振り分けることができた。

続いて、『十訓抄』の例を分析すると、次のようになる。まずは「のがる」の例を抜粋する。

- (九) 夫、世を遁れて、霸陵山に入りける時、…〔十訓抄〕
(一〇) 貞任らに囲まれて、みなのがれがたし。〔十訓抄〕
(九) は『平家物語』の(三)の例にならって(A)「意志」

である。(一〇)は、「のがれがたし」で「自分の意志で逃れることは難しい」となり、「のがる」は意志的行為として逃れることを意味している。よって(A)「意志」である。

次に「まぬかる」の例を見ていく。

(十二) 仏法を軽しめ、退けしわが朝の逆臣、天の殃をまぬがれず、いはむや庶人の身においてをや。〔十訓抄〕

この例の「まぬかる(まぬがる)」の対象は「天の殃」つまり「天の罰」である。これは『平家物語』の(七)の例と同様で、「どうしようもない事柄」で「天の罰」を受けるという運命である。従って(B)「無意志」である。

(十三) 履中天皇、いまだ太子の御時、御弟の住吉仲皇子のために武をおこして、太子の難波の宮をかこめりしに、太子…おどろき給はず。すでにまぬがれがたくおはしけるを、…

(十三) は四章においては(十二)と異なり「脱出」の意味になった。しかし、「意志」か「無意志」か、という観点で考えると(十二)と同じく(B)「無意志」と言えるのである。

「太子…おどろき給はず」とあるが、これは、太子が酒を飲んで眠ってしまったって起きない、という状況である。つまり自分の意志ではどうにもならない事態なのである。一方で、「まぬかる」に続く「ゝがたし」(「ゝするのが難しい、ゝすることができない」)に注目して、『日本語新辞典』の類語欄(2)「免れる」は「免れないこと」と打消しをつけるだけですむが、「逃れる」は人の力ではできないの意で「逃れられないこと」

というように打消し以外に可能も付けないと使えない。」と照らし合わせると、「*ゝ*がたし」は「*のがる*」に伴う語と言える。つまり、「*ゝ*がたし」に続けるには「*のがる*」を用いるのが妥当であるように考えられる。しかしこの例においては、「まぬがる」は眠ってしまった太子の行為についていうもので、とても「意志的行為」はできないという状況を表すのに(B)「無意志」の傾向の強い「まぬがる」が使われたのではないかと考える。

このように(十二)(十三)の例の他に、「譏諷のはなはだしき、弘墨のさきをもまぬかれがたし。」「將軍すでにせまりて、ほとどまぬかれがたかりければ、*：*」も含める『十訓抄』の「まぬかる」の例は、みな(B)「無意志」だと考えられる。ただし後者は、極めて「*のがる*」の例に近い用法で、(A)「意志」とも言える。いずれにしても、『日本語新辞典』の「免れる」は偶然など運命的なものが感じられる場合に使われることが多い。」という傾向に沿うものである。

表3でまとめた通り、他の作品でも『日本語新辞典』の類語欄に記載された傾向に沿うような結果が得られた。

第六章 まとめ

第五章では、四章で触れた古語辞典の主要四辞典に記載されている、和漢対立「*のがる*」「*まぬかる*」の意味・用法の観点で、軍記物、特に『平家物語』を中心に用例を分析していった。

そこでの分析観点としては「(a) 脱出、(b) 回避」という

二つの判断基準で意味・用法を振り分けるというもので、この場合は、全体的に、ある程度の使い分けの傾向は把握できたものの、二語それぞれでの使い分けがさほど明瞭にはならず、かつ、作品による傾向にばらつきが見られた。それが中世前半における傾向とも言えるかのようでもあったが、一方、和漢対立「*のがる*」「*まぬかる*」の使い分けを、十分明確に説明できるような結果とも言い難かった。

そこで、別の分析観点を模索する過程で、近代語以降、ここでは現代の国語辞典(具体的にはむしろ『日本語辞典』)と言えるような性格をもった辞典)における最新の解釈を用いて分析することとした。具体的には『日本語新辞典』である。

この辞典の「*のがれる*」の項目で、類語欄に記載された「*のがれる*」「*まぬがれる*」の異同基準を参考に、中世作品を改めて再分析し、意味・用法の区別をやり直した。その基準は「(A)「意志」、(B)「無意志」」ともに用例のある六作品(『狭衣』『平家』『平治』『曾我』『太平記』『宇治』)において、いずれもこの新体系としての基準に沿って、意味・用法を振り分けることができたのであった。

このような結果から見て、中世の語彙、特に和漢混交文である軍記物においては、より現代語に近づいている状態のものが一部ながらも存在することが指摘できた。中世語の意味把握には、古代語の観点だけでなく、近代語の語彙体系の観点も併わせることで、より正確な精密な分析が可能となるということ

『宇治拾遺』における「のがる」「まぬかる」

百十四	「大臣ゆるされぬ」と聞けば、罪なきことは遂に のがる ものなりけりとなん思ける。	無実の罪	無意志？
百十九	ある人の女、生贄にさしあてられけり。…さりとて、 のがる べからねば、なげきながら月日を過すほどに、…	娘が生贄になること	意志
一七四	浅ましく思ひて、ひきのかんとすれば、優婆多、股につよきはさみて、…はづかしくなりて、はさまれたるを 逃れ んと（すれど）も、すべて強くはさみてはづさず。	優婆多	意志
一八六	かくはかりぬることなれば、いま、軍責きたらんずらん。いかがして のがれ 給べき	軍	意志
五七	昨日おのれがおもしの石をふみ返し給しにたすけられて、石のその苦を まぬ かれて、うれしと思ひ給しかば、…	石の苦	無意志
六七	その年、この村の在家、ことごとく、えやみをして、死ぬる者おほかりけり。その魚のぬしが家、ただ一字、そのことを まぬ かるによりて、僧都のもとへ参りむかひて、此よしを申。	えやみ(疫病)	無意志
八三	此菩薩につかうまつり候が、地獄の苦をば まぬ かるべきにこそあめれと思ふ程に、…	地獄の苦	無意志
一〇二	この僧、誠をいたして、てづからみづから、かき供養し奉りて後、又二人が夢に、この功德によりて、たへがたき苦すこしまぬ が れたるよし、…	たへがたき苦	無意志

『狭衣』における「のがる」「まぬかる」の使い分け

一	「『かく』と知らましかば、参らざらまし」と、わびしけれど、笛 逃 るまじき夜なめれば、うるうるしげに取りなして、殊に人に知られぬ手を一二つばかり、吹き出して止みぬるを、…	笛を吹く状況	意志
一一	「とでもかくても、今は、いと のがれ 難き御仲にこそ。ついに聞かせ給てん」	狭衣と二の宮の関係	意志 「～難き」と有
二	「いかさまにして、(降嫁を) 逃 るるわざもがな」	降嫁	意志
二	「いかさまにして、この事(結婚) 逃 るるわざもがな」	結婚	意志
一	「弘法大師の御すみか尋ね見たてまつりて、猶この世をも 逃 れなん。弥勒の御世にだに、少し思事なくて」	世	意志
三	「いかさまにして、 逃 るるわざもがな」	結婚	意志
三	「もて離れたりける、御宿世どもかな。心ゆかずながらも、 逃 れ難かりければこそは、…」	宿世(宿命)	意志
三	宮は、賢く、入果てて、たて給へるに、わなわなと震はれて、遠くもえ 逃 れ給はず、やがてうつ伏せ給へり。	狭衣	意志
四	帝の御心地まことしう重らせ給て、一條院に渡らせ給ぬれば、 逃 れ給べきやうもなくなりぬるに、…	帝の讓位	意志
三	「五濁悪世を まぬ がれて、かの、契りし阿私仙に仕へん」	五濁悪世	無意志

表3：他作品の用例における「意志」「無意志」分析結果一覧

『平治』における「のがる」「まぬかる」の使い分け

上：三条殿～	兵四面に打立て、御所に火をかけたれば、上下の女房達あはてさばぎ出られけるを、散々に射ければ、火を のがる ものは矢を のがれず 、矢を のがる 者は火を のがれず 。	火、矢	意志
上：三条殿～	矢を まぬかれ んとする者はみにこそおほく入れ、下は水に溺、中は人に押し、上は猛火もえかかりければ、命のたすかるべき事を得ず。	矢	意志？ 意志の助動詞「む」が有
上：唐僧来朝	天竺より西へさる事七百里、白楽天の世を のがれ し所ぞかし。	世	意志

『太平記』（抜粋）における「のがる」「まぬかる」の使い分け

卷一	もし他人の口より漏れなば、我らに至るまで、皆誅せらるべきにて候へば、利行、急ぎ御辺の告げ知らせたる由を、六波羅殿に申して、共にその咎を 逃れ んと思ふはいかが計らひ給ふぞ]	咎	意志
	中の間に寝たりける若党どもも、思ひ思ひに打ち死にして、 逃る 者一人も無かりけり。		意志
卷二	「さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より他へはよも出でじ。探し出だして打ち殺せ」とて、手手に松明を点し、木の下、草の陰まで残るところ無く探しける。阿新、竹原の中に隠れながら、今はいづくへか 逃る べき。		意志
卷三	正成、必死のやりしりに死を 逃れ 、二十余町落ち延びて後を顧みければ、約束に違はず、早城の役所どもに火を懸けたり。	死	意志
卷四	越王死を 免 れて帰り給ひぬと聞えしかば、范蠡、ならびに王せき与を宮中へ入れ奉りぬ。	死	無意志
卷四	遂に姓名を替へ、陶朱公と呼ばれて、五湖と言ふところに身を隠し、憂き世を 逃 れてぞ居たりける。	憂き世	意志
卷十	賤しくも弓矢の家に生れ、名をこの門葉に懸けながら、武運の傾くを見て、時の難を 逃れ んがために、出家の身と成りて、天下の人に指を指されん事、これに過ぎたる恥辱や候ふべき。	時の難	意志 意志の助動詞「む」有
卷十四	その罪大いにして身を 逃る に寄り所無し。	罪	意志
卷十四	將軍たとひ御出家あつて、法体に成り給ひ候ふとも、勅勘 逃る まじきやうをだに聞こし召し候はば、思し召し直す事などが無くて候ふべき。	勅勘	意志
卷十四	高德一族等この時わづかに死を 免 る者、身を山林に隠し、討手の下向を相待ち候ふ。	死	意志
卷十五	軍の勝負は時の運に依る事なれば、あながちに恥ならねども、今日の負けは三井寺の合戦より事始まりつる間、我らが瑕瑾、人の嘲りを 逃れ ず。	人の嘲り	意志
卷十九	脇屋右衛門佐、前後の敵に囲まれて、とても 逃れ ぬところなりと思ひ切つてければ、なかなか心を一つにして、少しも気をたゆまさず。	前後の敵	意志
卷二十三	誠なるかな、天竺の斑趾王は仁王経の功德に依って、千王を害する事を止め、我が朝の楠正成は、大般若講読の結縁に依って、三毒を 免 る事を得たりき。	三毒	無意志
卷二十三	その時の人数には無かりける由、証拠分明なりければ、死刑の罪を 免 れて、やがて本国へぞ下だりける。	死刑の罪	無意志
卷二十四	武蔵国の住人に、香勾新左衛門高遠と言ひける者ただ一人、地藏菩薩の命に代はらせ給ひけるに依って、死を 逃 れけるこそ不思議なれ。	死	無意志？
卷二十六	朕、上人と師資の契り浅からず、早く娑婆に帰り給はば、菅丞相の廟を建てて、化導・利生を専らにし給ふべし。さてぞ朕がこの苦患を 免 るべき。	苦患	無意志
卷三十九	仏種は縁に従ひて起る儀も候ふなれば、今より薪を拾ひ、水を汲む業にて候ふとも、三年が間、常随給仕申し候ひて、仏神三宝の御咎めをも 免 れ候はん]	咎	無意志

が言えるだろう。本稿では、分析上の一視点と中世語としての「のがる」「まぬかる」の新解釈を提示した。

注

- 1 例えば、佐藤武義（一九六七）「漢文訓読語の国語の文章に対する影響―「クシテ」と「クテ」との比較を中心に―」『国語学』六八号や、峰岸明（一九七四）「和漢混淆文の語彙」など参照。
- 2 峰岸明（一九七四）「和漢混淆文の語彙」『日本の説話7 言葉と表現』東京美術（一九七四）なお、峰岸氏は「平安時代古記録の国語学的研究」をはじめ、二〇〇三「古記録の文章における表記とその言語」『国語と国文学』（東京大学）など、古記録の研究をされていた。
- 3 木村真紀（一九九九）「平家物語」における和漢混淆の文体史的方向性―「スミヤカ」「はやし」「とし」の「住み分け」と「生き残り」―『玉藻』
- 4 日野資純（二〇〇二）「今昔物語集のニグとノガル」類義語研究と古典解読―『国語と国文学』〔東京大学〕なお、日野氏は他にも、古語の基礎語研究として『基礎語研究序説』桜楓社（一九九一）があり、（一九九七）「古典文学の作品における「中」字の訓―ナカとウチの意味分析」『国語と国文学』や、（二〇〇三）「短信」『廻り行く』『廻り行く』『廻り行く』等―今昔物語集の異訓統一を考える』『国語学』、といった、語彙と古典

注釈に関わるご研究がある。

- 5 田中牧郎（一九八七）「今昔物語集の「逃」「遁」「免」「脱」と「ニグ」「ノガル」「マヌカル」」『国語学研究二七』
- 6 用例文引用元
『平治物語』『平家物語』は「日本古典文学大系」、『狭衣物語』『宇治拾遺物語』『十訓抄』は「新編日本古典文学全集」、『太平記』は「土井本太平記 本文及び語彙索引 本文編上・下」（西端幸雄「勉誠社」一九九七年）による。
【参考文献】
○辞典類
『日本国語大辞典 第二版』小学館 二〇〇一年
『角川古語大辞典』角川書店 一九四八年
『岩波古語辞典』岩波書店 〔第1版〕一九七四年〔補訂〕一九九六年
『時代別古語大辞典 室町編』三省堂 二〇〇〇年
『日本語新辞典』小学館 二〇〇五年
○先行論文
佐藤武義（一九六七）「漢文訓読語の国語の文章に対する影響―「クシテ」と「クテ」との比較を中心に―」『国語学』六八号
峰岸明（一九七四）「和漢混淆文の語彙」『日本の説話7 言

語と表現』東京美術

田中牧郎（一九八七）「今昔物語集の「辻」「遁」「免」「脱」と「ニグ」「ノガル」「マヌカル」『国語学研究二七』

木村真紀（一九九九）『平家物語』における和漢混淆の文体史的方向性―「スミヤカ」「はやし」「とし」の「住み分け」と「生き残り」―『玉藻』

日野資純（二〇〇二）「今昔物語集のニグとノガル―類義語研究と古典解読―」『国語と国文学』〔東京大学〕

〔付記〕本稿は、学習院大学大学院の次の授業における調査・発表を元にしてまとめたものである。「平成二五年日本語学演習（安部清哉教授）」なお、各語の語義解釈においては安部清哉教授（学習院大学）のご助言によったところがある。